ジュニア広報
なりた
市制50周年特集号
（平成16年11月15日発行）
編集・発行
成田市教育委員会／〒286-8585　花崎町760番地　☎22-1111大代表

成田市制施行50周年記念事業「作文コンテスト」

夢を託そう！ 成田のまちに　わたしたちの学校に

作文コンクールの趣旨

成田市が市制施行５０周年を迎えるにあたり、市内の小・中学生が成田の歴史・文化・伝統、現在と未来のまちのこと・学校のことなどについての思いや考えを作文にしました。それらの作品の中から最優秀賞９点、優秀賞２７点、佳作７３点が選ばれました。今回は、小学校１年生から中学校３年生までそれぞれの学年の最優秀賞に輝いた作品を紹介します。

ともだち

吾妻小学校　一年　関口　日奈

わたしのとなりのせきは、しょうへいくんです。にゅうがくしきのひ、どうしてくるまいすにのっているのかなとおもいました。せんせいが、「しょうへいさんは、あかちゃんのときにからだにわるいびょうきがはいってしまって、おはなしすることも、あるくことも、みなさんのようにできません。」と、はなしてくれました。そのとき、しょうちゃんがきゅうにわたしのてをなめたので、すごくびっくりしました。それは、「よろしくね。」というあいさつなんだと、しょうちゃんママがあとからおしえてくれました。

それから、まいにちいっしょにあそんだり、べんきょうしたりするうちに、しょうちゃんのきもちやわたしがてつだえることが、だんだんわかるようになってきました。しょうちゃんは、キラキラひかるえんぴつがすきです。おべんきょうがいやそうなとき、わたしのキラキラえんぴつをノートにおいてあげるとつづきをはじめます。クラスのおともだちも、しょうちゃんとなかよくあそびます。しょうちゃんがなきそうになると、「しょうちゃん、なかないよ。がまん、がまん。」と、みんなでこえをかけます。しょうちゃんは、くちをぎゅっとむすんでてをにぎりしめてがまんできるようになりました。

しょうちゃんは、はなせなくてもみんなにやさしくすることやたのしいきもちにするにはどうしたらいいかおしえてくれているからすごいなとおもいます。わたしは、しょうちゃんといっしょにべんきょうしてきたので、しょうちゃんとおなじようなともだちにあったときも、なかよくできるとおもいます。

あたらしいともだちとであえたにゅうがくしき

成田大すき

橋賀台小学校
二年　村田　惇

ぼくが成田に生まれてよかったと思うのは、しぜんがいっぱいだからです。学校には木や草や花がたくさんあるし、公園もたくさんあります。ぼくは、よちよち歩きのころから、ニュータウンの中の公園をたくさんおさんぽしたそうです。今はおねえちゃんや友だちとよくあそびに行きます。たくさんあるので今日はどこにしようかとまよってしまうほどです。

一ばんすきな公園は、長い長いローラーすべりだいのあるさかたが池公園です。スピードを出してすべると、とてもおもしろいです。アスレチックをしたり、大きな池やしばふのひろ場であそんだり、一日中いてもあきません。学どうの人たちといっしょにバーベキューをしたこともあります。

成田は、しぜんがいっぱいなだけではありません。日本一の空こうや成田山があるし、図書かんやプール、えいがかんや大きなショッピングセンターなどもあります。

「成田はいいよ、とってもすみやすいまちだよ。」

と、ぼくたちがいつも言っていたので、おじいちゃんとおばあちゃんが、なつ休みに成田にひっこしてくることになりました。大すきなおじいちゃんとおばあちゃんに、大すきな成田のいいところをたくさん教えたりあんないしたりしてあげたいと、今からとてもたのしみにしています。

大すきなさかたが池公園

やっぱり成田大好き

橋賀台小学校
三年　ミンベラ　ブルーノ

ぼくのお母さんとお父さんは、十年前にペルーから日本に来ました。日本ではたらいてお金をためるためです。お母さんは、ホテルでベッドメーキングの仕事をしています。お父さんは、成田空港でにもつをはこぶ仕事をしています。

ぼくは、お父さんたちが日本に来た次の年に生まれました。だから、ぼくは日本生まれです。

ぼくの家では、ペルーのおさらをかざっています。ごはんは、カレーや肉の料理やフルーツジュースです。家で話す言葉は、全部スペイン語です。お母さんたちは、言葉がよくわからないのでぼくが教えます。お母さんたちは、仕事が好きで成田に来てよかったといっています。

ぼくも、成田が大好きです。楽しいなかまがいるからです。ぼくが、手をこっせつした時、しんぱいしてくれたり、てつだってくれたりしてうれしかったです。漢字れん習をいっぱいして来た時も先生やクラスのみんながいっぱいはく手してくれました。ぼくは力がもりもりわいてきました。

お父さんとお母さんに、

「みんなが、ほめてくれたよ。」

というと

「すごいね。よくがんばったね。いいクラスだね。」

とにこにこしていました。

成田は、おまつりが一年中たくさんあるので気に入っています。いちばんたのしみなおまつりは、成田ニュータ

楽しい出店が並ぶ成田ニュータウンまつり

ウンまつりです。おもちゃを買ったりゲームをしたりして遊びます。ことしもあるので、たのしみです。

ペルーのおまつりは、広場に大きなきらきらしたかざりをいっぱいつけた車が百台あつまります。花火も上がります。たいようの神さまにおれいをするのです。成田では、百台の車はでないけれど神さまをたいせつにしているのは同じなんだなと思いました。

ぼくの通っている橋賀台小学校は、ぼくのような外国の子どもが勉強しています。ペルーやメキシコ、ブラジル、かん国の人たちです。

みんな、クラスの友だちといっしょに勉強しています。ときどき、日本語教室に通っています。ぼくは、これからもずっと成田に住んで、勉強していきたいと思います。

だって、ぼくのふるさとは成田だからです。大好きな成田でいっぱい友だちをつくっていきたいなと思います。

ペルーの聖カルメン祭

ペルーの人にも成田のよい所をおしえてあげたいと思います。

やっぱり、ぼくは成田が大好きだよ。

わたしの好きな祇園祭

成田高等学校付属小学校
四年　川村　真貴子

七月の成田には、わたしの大好きな行事があります。それは、『祇園祭』です。その中でも一番好きなのは、山車が仲之町の坂をかけ上がるところです。「ワッショイ、ワッショイ。」と声を上げながら、小さい子供から大人までおおぜいの人達が一気に上がります。みんなが一つになったみたいで「ヤッター。」という気分です。

歩けるようになって初めて山車をひいたとき、すごく楽しかったので、それからずっと参加しています。わたし達がひいていて、つかれてくると「ガンバレー。」とやさしく声をかけ、せんすであおいでくれる人がいます。

「フー」と、一息ぬいて大きな声で、「ワッショイ、ワッショイ。」と声を上げます。すると、見にきているお客さんみんなが、わたし達をはげましているように見えてきて、わたしはさっきよりも力がわいてきます。さっきまでの暑さも、感じられなくなってきます。

いつもは、成田山の山車をひいていましたが、今年は、「手古舞」で参加します。毎年、「山車をひくぞう。」という元気な気持ちだったけれど、初めて、手古舞で山車の先頭を歩きます。なんかうきうき、わくわくしています。

「チャンポン、チャンポン。」という手古舞のあの音が、わたしは好きです。今度からは、自分であの音を出し、今までよりも身近であの大好きな音が聞けると思うと、すごくうれしく、楽しみという気持ちでいっぱいです。私があこがれているのは、かみ形です。ふだんやらないようなかみ形がきれいだからです。かみの毛に付けるかんざしなどは、赤や黄色のあざやかな色があり、かみをかざってくれます。かみの毛にまく、くみひもは、むらさきか黄緑を付けたいと思っていました。

祭りの前の日は、ワクワク、ドキドキしてよくねむれませんでした。最初の日にはあこがれていたかみ形にしてもらいました。付けてほしいと思っていたかんざしをつけてもらいました。そして、私が知らなかった風りんのかんざしなども付けました。すごくうれしかったです。風りんのかんざしは、歩いているとたまに音がでます。つかれている時は、はげまされる音です。初めは、みんな元気で、てこぼうが軽く感じられました。音がちゃんと合っていて、きれいな音がでていたけれど、つかれてくるとてこぼうが重くなり、みんながばらばらになって、音がにぶくなってしまいます。ばらばらになると、つきそいの人が一回止めて、やり直してくれたり、合っていない人の近くに行って、手をたたいたりして合うようにしてくれます。

二日目は、みんななれてきたようで、みんなのリズムが合っていて、「がんばるぞ〜。」という気がでてきます。そんな時は、つかれた気分もふっ飛びます。

三日目は、疲れがたまり起きるのが大変でした。でも、かみ形を一番ごうかにしてくれました。最後にごほうびで食べたアイスは最高でした。

お祭りのリズムを手古舞で作ってきたので、わたし達が、大事な役割をしていると思いました。何かをやりとげた気持ちでいっぱいです。わたしにとって、『祇園祭』は、わたしの心をいっぱいにしてくれる成田の大切な行事なのです。

仲之町の坂をかけ上がる山車

私の育った町

平成小学校
五年　佐々木　悠

私が生まれた所は、成田です。そして、育った所は、宗吾れい堂です。宗吾には、祖父母が住んでいます。祖父も、宗吾れい堂で生まれ育ちました。宗吾に住んでいる人達は、みんな宗吾れい堂を大事にしています。

宗吾れい堂では、沢山の行事があります。

一月には、初もう出。一年間の幸福を家族全員で祈ります。初もう出の人々をむかえるため、お寺の人といっしょになり、宗吾の若い人達が、おはやしをやったり、火をたいたり、コンサートをやったりして盛り上げてくれます。春、桜の季節、花見で盛り上がります。夏は、おぼん。先祖をむかえます。そして、九月には、宗吾の最大のイベント、お待夜祭です。この祭は、宗吾の農民のために、佐倉宗吾郎が江戸に行き、農民が貧しい生活からのがれられるようにうったえ、自分の命とひきかえにし、命を落とした日です。この宗吾郎にみんな感しゃしています。その気持ちを、お年寄りから若者までが協力して、盛り上げます。一年のうち、宗吾の町が一番にぎわう時です。

お寺を中心に、季節の行事を生活の一部として、くらしているのです。何十年、何百年も変わっていません。これからも、うけつがれていくと思います。いろんなことが変わっていき、新しいことがあらわれて来る現代、変わらないものが、ここにはあります。これが、『ふるさと』というものかなあと思います。

また、宗吾は、ふだんでも、温かくむかえてくれます。私が初めて歩けるようになり、お散歩をしたのも、自転車に乗れたのも、一輪車に乗れたのも、なわ跳びができたのも、宗吾れい堂で練習したからです。私の成長の様子を宗吾れい堂の三好のおばちゃんやおぼうさんが見ていてくれました。私が宗吾れい堂に何日か顔を出さないと、心配してくれます。宗吾れい堂に集まる人は、私の家族のような感じです。私も、三好のおばちゃんがいないと、とても心配になります。みんな、同じ気持ちなんだと思います。

いつも温かくむかえてくれるのが宗吾れい堂です。いつも同じ所に同じ人がいてくれるということは、いつ行っても安心できるということです。こうやって、宗吾の人々は、育ってきました。このまま、人の心も、町のかん境も、変わらないように受けついでいかないといけないと思います。

そのために、私は、宗吾のみんなに教わった、感しゃをしながらあいさつをすること、人を思いやる気持ちを忘れずにくらし、「あの人がいるから、あそこにもどりたい。」と思われるような町作りができる人になりたいです。

町中が盛り上がるお待夜祭

わたしを育ててくれた宗吾れい堂

私の好きな成田

公津小学校
六年　工藤　友香

私の生まれた所。それは成田。今、住んでいる所も、もちろん成田。私は生まれてからずっと成田に住んでいる。

一年間の中で、私が一番好きな日。それは七月三十一日。なぜならその日は麻賀多神社の祭の日だからだ。公津の麻賀多神社は、印旛郡市内十八社の惣社。延喜式の中でも香取神宮について記載されるほどの由緒ある神社だ。

麻賀多神社の本殿には、樹齢千二百年を数える杉の木がある。関東一の大杉で千葉県から天然記念物に指定されている。千二百年という時の流れ。どれほどのものなのか想像もつかないが、この木の前に立つと理屈ぬきで「すごい！」と感じる。そして「明治の頃も江戸時代もこの杉は人々を見守ってきたのだろう。」とも思う。私のようにこの木を見あげた子ども達が何人いたことだろう。ふと自分が昔にタイムスリップしたかのように感じてしまう。

天をつく白いのぼり。昔から人々は、何をいのってきたのだろう。どの祭りにもその由来や成り立ちがあるけれど、そこに私はいつも人々の思いを感じる。この土地に住み、この土地を愛した人達の思い。この大杉は、それらをみんな知っているのだろうか。

下方の年の時、台方の子ども達は手古舞ができる。私も二回やってみた。髪の毛を分けて上に持ち上げそこにかんざしをさす。手甲にきゃはん、色どりはとても鮮やかだ。「昔の人は何を思ってこんな色にしたのかなあ」と不思議に思う。けれど回りの緑に映えて、とても美しい衣しょうである事も確かだ。

真夏の日ざしの中、このかっこうはとても暑い。あらかじめ決められたルートを錫杖を鳴らしながら歩く。体はあせでびっしょりだ。しかしここでも、これまでこの土地に住んでいた人達の願いを感じてしまう。自然に背筋がのび、「きちんとやりとげたい。周りの人の期待に応えたい。」という思いがひしひしと胸に湧いてくる。

田んぼの稲が若々しく成長している様子をみると、なぜだかほっとする。私の祖父と祖母も田んぼを持っている。一生懸命に田の仕事をしている姿をみると、どうか今年も無事に米がとれますようにと願う。そういえば、先生が言っていた。日本の田んぼの景色は美しいと。秋の黄金色の田も好きだけど、暑さの中、目にも鮮やかな緑の七月の田もすてきだなと思う。

夜になると獅子舞の登場だ。私の父も女獅子とひょっとこの役で舞った事がある。あれは父がやっているのだと思いながらも、獅子の動きにひきつけられずにはいられなかったのを思い出す。考えてみれば、あの舞い一つとってみてもここ公津に古くから住んでいたたくさんの人々の願いがこめられているのだろう。

印旛沼を臨むこの地。水が光を反射する景色も美しい。そしてそこに住む人達の思いがこの祭りに感じられる。この地に生まれ、この地に生きている。それだけでたくさんの贈り物をもらっている。獅子舞が終わってみんなが拍手をする。その音がいつまでも、心に響いている。

女獅子とひょっとこ。印旛沼近くのおまつり広場でも獅子舞が行われる

大杉のある麻賀多神社から印旛沼へ向かう神輿

私達の成田市

西中学校
一年　高木　文生

私の住んでいる成田市は、市と住民が一緒になって、町をよくしていこうという活動が盛んだと思います。

まず一つめには、ごみ0運動が挙げられます。成田市はごみを減らそうと努力していると思います。西中には、一年に二回「クリーンアップデイ」という行事があり、自分の住んでいる所の周辺をきれいにする活動をしています。全校生徒が、保護者や先生と一緒に各地区に行き、ゴミを拾って町をきれいにするのです。

また、市全体でも、年に二、三回西中と同じように、「環境美化作業」があります。実施前に回覧を回し、地区の人々に協力を呼びかけます。毎回、朝早くからたくさんの人が自宅近くの草取りをしたり、ごみ拾いなどをしています。私も、前回の美化運動の日に、母と一緒に駅のフェンスにからまったつるを取ったり、下に落ちているごみを拾ったりしました。作業中に、フェンスの内側に、バイクやごみ箱が捨ててあるのをみつけました。それを見て、なぜこんなものがこんな所にあるのかと不思議に思い、腹だたしさを感じました。

それから、私の地区では、二ケ月に一回小学校の子供会でも、「リサイクル運動」を行っています。みんなが手分けをして地区を回り、新聞やカン、ビン、ペットボトルなどを集めるのです。私も小学校の時、この活動に参加していました。学校の授業での「わたしたちの願いを実現する政治」という単元で、根古名川が汚いということがあがりましたので、私たちは友達と根古名川にごみを拾いに行きました。たった三時間ぐらい歩いただけなのに、燃やせないごみの袋とカン、ビンの袋と、燃やせるごみの袋がすべていっぱいになりました。中には、自転車などの大きなものも捨てられていました。

このように、成田市は、美化運動に力をいれています。ポイ捨て禁止の条例もあると聞きました。でも、美化運動をすると、たくさんのごみが集まります。これは、ごみを捨てる人たちがそれだけたくさんいるということです。ごみを捨てないという一人一人の心がけがとても大事だと思いました。

毎年多くの市民が参加する根木名川の清掃

二つめには、「花いっぱい運動」が挙げられます。私は小学生の時に、学校でこの運動をやっていました。この「花いっぱい運動」というのは、サルビアなどの花を参道の店に届けるというものです。私が参道を通った時、成田小学校で育てた花がいっぱいかざってあって、とてもうれしかったことをよく覚えています。また、成田小学校ではなく、大人が行っている運動もあり、その活動が認められて国から賞をいただいたそうです。

このように、成田市では、市や地域の住民が一緒になって、町をよくしていこうという運動がいくつもあります。

成田市は、国際空港があり、日本の玄関でもあります。日本の玄関という意識を持ち、成田市を今以上によくするために、これからも、市のいろいろな行事に積極的に参加したいと思います。

花があふれる表参道

地球国・成田

西中学校
二年　櫻井　真琴

二十年後の成田市は、どうなっているのだろう。私が生まれてから十四年たった今ですら、家のまわりの風景は大きく変化している。二十年後は私達が驚くほどに変わっているはずだ。想像するだけでも楽しくなる。私の願いも入れた未来の成田について考えてみよう。

二十年後、未来の成田は市全体が一つの大きなテーマパーク「地球国」になっている。世界の空を結ぶ窓口は成田空港だ。空港のまわりにはホテルや会議場など大きなビルが建ち並び、いろんな国の人たちが交流を持つ国際親善の場所になっている。田園地帯は巨大なビオトープだ。野生の動植物が、互いの生態系を保ちながら生息できる豊かな環境がしっかりと残され整備されている。成田山新勝寺のまわりにはたくさんの歴史的な建物が自然と調和し存在している。人々がくつろぎ、いやされる場所だ。そこでは、自分が日本人であることが自然に認識できるから不思議だ。すがすがしい、広い境内に入ると祇園祭の笛の音が遠くかすかにきこえてくるようだ。イオンなどのショッピングセンターは今よりもずっと規模が大きくなり、千葉県全域から人々が集まってくるエリアとなった。人々が安心して買い物や娯楽を楽しめる場所になっている。

老人ホームや障害者施設も充実している。みなが家族のように支えあって暮らしている。福祉面に最も力を入れている成田市だ。ホームや施設に住んでいる方々は、笑顔にあふれ、働いている職員も、戸外で出会う人々も、優しいまなざしでお年寄りや障害者を見つめている。みな、いつかは自分がお世話されるのだ。家族を支える気持ちで接している。道路や線路も、私達が驚くほどに変わっているだろう。その頃走っているのは路面電車だろうか。自動車やバスは環境に優しい電気で走っている。道路は高架型と地下型の二種類にわかれている。そのため、踏み切りがなく、渋滞になることもない。道路は、歩行者と自転車、自動車と、それぞれが分離されている。老人も子供も安心して通ることができる。「地球国」のテーマパーク内は安全で、スムーズに移動ができるのだ。

未来の街角にもきっとこんな公園が

さて、その頃私はどう生きているのだろう。私は社会を支える立場の年齢になっている。生きがいを持って一生懸命仕事をしているだろう。自分の人生を大切に生きるためだ。私は老人ホームで働いている。成田に暮らし、成田を作り上げてきたお年寄りを、最後まで精一杯支えていきたい。その頃は自分にも子供がいるだろう。子育てに優しい安全な街であってほしい。働き盛りの人達が、生き生きと仕事ができる街、地域の人達が思いやりを持って協力できる街、高齢になっても、障害者になっても、安心に暮らせる街。全ての人々が尊重される街であってほしい。

テーマパークを訪れるように、世界中から多くの観光客がやってくる成田。ここには地球の良いところがギュッと詰まった、一つの世界が存在している。世界中からの訪問者が、そのまま住みたくなるような市。地球を代表する成田市。もちろん、そこは私にとってかけがえのないふるさと、自慢のふるさとだ。そして、テーマパーク「地球国・成田」が実現できる日をこの目で見よう。その日を楽しみにしている。

「地球国・成田」と世界を結ぶ成田空港

国際都市・成田

成田高等学校付属中学校
三年　青菜　麻希

少し前に、福岡に住んでいる私のいとこが初めて成田山を訪れた時のことだ。参道のところどころで外国からの観光客を見かけて、「成田には外国の人が沢山いる。」と、そのいとこが驚いていたのだが、この言葉に私の方が驚いてしまった。私は参道を登校のために毎日通り、外国から来た観光客らしき人達を日に二、三人は必ずといっていいほど見かける。道の途中で外国の人とすれ違っても、それを当然のことだと思っていたのだ。そこで母に聞いてみると、同じように「確かに多い。」と言われた。私は成田空港の規模が大きいことは知っていたものの、この時に初めて、成田が「国際都市」であることをはっきりと認識させられたような気がした。

以前、私は参道で二回ほど外国の人に道案内をしたことがある。二人とも英語圏の人だったのだが、英語でうまく説明することが出来なかったので、結局は二回とも目的の場所まで一緒に行くことになった。全く面識のない上に言葉の壁があるためとても緊張していた私に、二人はたくさん話し掛けてきてくれた。英語なので内容は少ししか理解できなかったけれども、それでもわずかながら答えを返したりして、ちょっとした会話が出来たのがとても楽しかったということが記憶に残っている。

空港があり、観光地として有名な成田山のある成田市では、このように外国の人と接する機会も多いように感じる。また、成田市は中国とアメリカ、韓国などの五つの都市と、友好・姉妹都市として、使節を派遣したりして交流を持っている。他にも、国際こども絵画交流展などの様々な行事を行っているということが調べてみてわかった。正直なところ、このような交流を持つことで、どのような点で良いのかと聞かれても、私にはあまりはっきりとはわからない。けれども、このようにいくつもの外国の都市と交流関係を持つのは素晴らしいことだと思う。外国と、より密接にかかわることが多くなってきている今、国際交流はとても重要になってきていると思うからだ。また、異文化に興味のある人がそれによって異文化に触れることが出来たり、関心のない人もそれを知ることによって新たに興味が出てくるかもしれない。そう考えると、このような国際交流というのは色々な可能性を秘めたもののように思える。

成田山を歩いていると、外国人専用食堂のような洋食店を時々見かける。しかし私は、それらの店が老舗などに混じっている風景もあまり違和感がないように感じる。また、少し前の祇園祭で、外国の人が町の人と一緒になって山車を引いている姿を見かけたことがある。これらも「国際都市・成田」ならではなのかもしれないが、私はそれを見て、これからどんどん外国とのかかわりが増えていくと思われる成田の将来について、少し考えさせられた。成田山や参道の老舗のような、昔から存在するものと、外国から入ってくる新しいものとの二つの文化。新しい文化を取り入れることはとても大切なことだと思うけれど、それと同時に古いものが廃れていかないようにもしなければならないのではないかと思う。段々と国際化の進む成田市の将来が、日本の文化と外国の文化、古いものと新しいものとが互いに潰し合ったりせず、それぞれうまく調和している姿になってほしい。

毎日たくさんの外国人が行き交う参道

あとがき

これからの成田を支えていく小・中学生の皆さんが、成田のまちや自分の住んでいる地域について前向きに考えていることが伝わってきました。

今後も、友だちや家族、自分と係る大人の人たちと、わたしたちのまち成田について語り合っていってほしいと感じました。